

## Y12b 国際天文学オリンピックへ日本チーム初参加

中道晶香（京産大共通教育）、長谷川隆（県立ぐんま天文台）、高橋英則（東大木曾）、井上毅（明石市立天文科学館）、塚田健（平塚市博物館）、青沼恵人、伊藤寛子、大野智洋、大野浩輝、岡本沙紀、川口音晴、北川陽斗、妹尾梨子、田中匠、千葉遼太郎、中尾俊介、山田耀（東大）、安藤唯花（北海道教育大）、大平達也（京大）、岡崎小春（東京藝大）、小野祐（Harvard Univ.）、桑江優希（広島大）、清水美結（東京理科大）、牧田遥翔（埼玉大）

国際天文学オリンピック (IAO) は、選手同士が知的競争を通じて創造性、想像力、および宇宙科学への関心を深めることを目標に、1996年から毎年開催されてきた。出場を希望する中高生は多かったが、これまで日本代表選手の派遣は行われていなかったため、このたび大学生有志による学生団体が中心となって日本チームを派遣した。

予選は203件の応募があり、うち中学3年生から高校3年生までの5名の代表選手が2022年イタリア大会へ出場し、3名が銅メダルを受賞した。なお、コロナ禍によるリモート開催となり、試験時間が夜間となること等を考慮して東京大学木曾観測所の会場から参加した。4時間に及ぶ理論試験では、さまざまな設定の問題を通じて思考力が試されたが、中高生には難問であり、記述式の答案の書き方指導も今後の課題である。ビジュアル（地図・画像）試験は、現地で望遠鏡を操作して天体を導入する観測試験の代替として行われた。3時間の実技試験は、実際の観測データをもとに方眼紙にグラフを描きつつ解答する実践的な内容だが、苦戦する生徒が多かった。

問題文のリモート・プリントや多数のWEBカメラとスキャナー等の機材の準備、事前通信試験など、リモート開催ならではの困難もあった。本講演ではイタリア・リモート大会について報告し、代表選手のアンケートから見えてくる教育効果、およびIAOに関する将来への展望と課題について議論する。